

〔講演〕

## 神の言葉と説教

入 船 尊

はじめに

宣教師経験者として、インドネシアの状況もふまえながら語ってほしいと求められたのですが、この講演をするにあたりまして、その問題意識や動機の中に、インドネシアでの働きの中で示されたことがらが否定することができないように関係していることを認めざるを得ません。

その働きの中で、機会あるごとに日本の教会とその現状について報告することを求められました。まずインドネシアの人々を驚かせたことは、日本のキリスト教人口が約一％にすぎないということでした。そして、いろいろな機会に、日本における伝道の前進のために祈られたのでした。このような中で、私自身の内にも、改めて日本伝道の使命の自覚が促がされたのでした。

さて、伝道にせよ、教会形式を考えるにせよ、そこでどうしても中心的になるもの、最も重要な働きとなるものが

説教であることは異論のないところでしよう。そこで、日本における伝道と教会形成の中で直面する、説教の問題点のいくつかを共に考えるのが、この講演のねらいであります。

発題の中で基本的な問題が十分に取り扱われると思えますので、つとめて具体的に問題の所在を明らかにされるようにと心がけております。言いかえますならば、語りかける対象、日本という精神的、宗教的土壌の中で、特に問題となる点を考えたいと思うのです。このことをめきにしては、主からの御期待、また、世界の主の民の関心と祈りである、日本伝道の前進は考えられないからです。それは「コンテキスチュアライゼーション」の問題意識を踏まえた問題提起とも言えます。

### 福音の出来事の告知

巡回伝道の中で、多くの人々と対話をする機会が与えられているのですが、そこで思わせられることは、いかに日本人にとって、キリスト教の本質が、出来事として、イエス・キリストにおいて起ったことがらとして知られていないかということです。日本人の多くがとらえている、先入観として持っているキリスト教理解は、道徳的修養としてのそれであり、あるいは禁欲的修行でもありません。儒教道徳的、あるいは仏教的背景の中で、キリスト教伝道の接点を求めたとき、ここに強調点がおかれたこと、受けとる側も、そのような先入観でとらえがちであるということは十分考えられることでしょう。

こういう中で、何が改めて自覚的に明確にされなくてはならないかは、おのずから明らかでしょう。福音伝道であるかぎり、福音の中心、イエス・キリストに起った出来事が力強く、明確にされなくてはならないということです。

ペンテコステの日になされたペテロの説教（使徒行伝二・一四―三六）を見てもこのことは明らかなのですが、日本伝道というコンテキストの中で、考え直そうとしているわけです。

たとえ道徳的修養に力点を置くキリスト教理解で、多くの人々が信じたとしても、そこからは、イエス・キリストに起った、神の大きな出来事への驚きと讚美に結びつく伝道はでて来ないのでありますから、主の願っておられるような伝道はなされないのであります。しかしながら、今ここでは、提示の仕方や順序を問題としているのではありません。語る対象を真剣に考えるとき、語り方、提示の仕方は、まことに重要ですが、ここでは、ことがらの重要性という観点から考えているわけです。つまり、キリスト教の伝道が、福音伝道であるゆえに、福音の中心が明確に語られなくてはならないということは、日本伝道において、いつでも最初に、ということの意味しているではありません。日本人の多くが宗教を求め、あるいは教会に来るとした場合、人生の意味を求めたり、よりよく生きるための道を求めたりすることが動機であることを考えるならば、どうしても、人生論的アプローチの方法は避けられないことでしょう。これらのことを無視して、いきなり福音の中心が語られたとしても、その結果は、キリスト教とは、私の問題から遠いものという感じを抱かせることにもなるでしょう。インドネシアとの比較で考えるならば、はるかに日本においては、この面の配慮が必要と言えます。イスラム教を背景とするような社会では、宗教的な問題が、社会や日常生活そのものに深く関係していますから、いきなり宗教の本質、福音の本質にふれて行くことも容易ではありません。しかし日本のような社会では、各人の持っている問題が、実はイエス・キリストの福音の中に解決を持っているのだということを明示するまでのプロセスの構成の配慮は、まことに大切なものであります。これらの問題はあとでもふれますが、ことがらの重要性ということで、福音理解の明確化と徹底が、説教において具現されることは、第一のことでもあります。

福音が理解され、受容されるということは、言いかえれば、日本人の心に、聖書的な神が提示され、知らしめられるということ。福音とは、神がどういうお方であり、その方が何をなさったかということの知らせであります。「救いは神から来る」、これそれは聖書を貫いているメッセージです。福音がわかるということは、神がわかるということでもあります。ですから日本伝道の究極の課題は、この日本人の心に、聖書に示されている神をどこまで明確に植えつけることができるかということになります。どのような提示の仕方、アプローチの方法をとりましようとも、究極的には、ここが明確にされないかぎり、歴史に耐え得る伝道とはなりません。

ここをふまえて、伝道がなされるべきとき、説教がなされるべきとき、日本人の心に、今まで聞いたことも、考えたこともなかったような神を語ることとなります。はっきりした人格を持たれた神、人間の意識や、理念の延長上にある何かではなく、人間そのものを、この世界全体を創造された神、それでいて、イスラエルという特定の民族を選んで、「あなたは、わたしのしもべ、わたしは、あなたを選んで捨てなかった」(イザヤ四一・九)と言われるほどに、御自身の民に向って、心をこめ、配慮をされる神、そして時満ちて、御子をつかわし、イエス・キリストにおいて、最終的に御自身を啓示され、救いのわざを成就なさった神、このような確実な存在としての神を、日本人は考えたことも、聞いたこともなかったという状況の中で、説教はなされます。

ところが、インドネシアのようなイスラム社会では、日本からみるならば驚くべきというほかに、神の存在性や、超越性、創造者、万物の支配者という面は、自明のこととして受容されているのです。日本の場合、たとえば「神」という言葉が用いられているとしても、それは何を意味しているのかを、一々問うてみることは決定できないのです。決して、人間とは別に存在している何かであるなどとは考えられていない場合、つまり、人間の理念をさすことだってあるからです。それならば、イスラム教が聖書的神観の本質に到達しているのかと問われるなら

ば、答えは否であります。唯一性や超越性は主張できても、神の最終的啓示者、イエス・キリスト(ヘブル一・一二)を拒否するゆえに、決定的な神との出会いを不可能にしているのです。信するだけでなく「見る」と言えるほどに神との出会いを表現して下さるのがイエス・キリストだからです(ヨハネ一四・七、九)。

このようなことを明らかにしながらも、日本人の神概念には、唯一性も、絶対性もないのですから、さらに曖昧であります。

### 説教における預言者の働き

神の言葉と説教と言われるとき、さらに具体的に、その内容が何であるかを今考えているのですが、このことは旧約の預言者たちのメッセージに注目するときにも、よりはっきりして来ます。神が旧約の預言者たちに、預言せよと迫られるとき、その第一のことは、ほかでもなく、神御自身についての証言であります(イザヤ四三・一一三、エリヤ一・一一〇)。

神の言葉を託されて語る説教者もまた、その説教によって、神がどういうお方であるかを語ります。ここからも説教者の務めの非常に大切な点が明らかになります。神の言葉、テキストとの関係で一番重要な、中心的なことからは何でしょうか。それは、テキストが語らんとするメッセージを聴くということに尽きるでしょう。このことのために、釈義も瞑想も、あらゆる営みが集中されるのです。説教者は語る前に聴かなくてはなりません。与える前に、受けなくてはなりません。聴いて語り、受けて与えるのです。これがまさに、説教における預言者の働きであります。もちろんここで、重要な働きをなされるのは、聖霊なる神です。かくれたる神の奥義を明らかにされる方は、聖霊だ

からです(コリント第一、二・六一―一六)。イエスが誰であるかを証言し、また、キリストのなされたことを受けて、これを人間に解明しつづけておられるのは、別の助け主、聖霊だからです(ヨハネ一五・二六、一六・一一―一五)。聖霊なる神のお働きを求めることなくして、説教者がテキストから確かにメッセージを聴くことはあり得ません。

説教に関して言われる不満の一つに、分かりにくいということがあります。六日間の労働に身も心も疲れて教会に來た者にとって、説教が分りにくいということは、まことに深刻な、腹立たしい不満となることは避けられないことでしょう。もちろん聴衆の側に問題がある場合もあるのですが、ここではテーマとの関係上、説教そのものについて考えてみたいのです。分らないということの理由には、いくつものことが考えられますが、今論じていることとの関係で言いますならば、メッセージがはっきりしていないということも大きな原因の一つでしょう。その説教に、全体として、何が何でもこれだけは語らねばならない、というものが欠けているか、あるいはまだ鮮明になっていない場合が考えられます。前者の理由は、説教者がそのテキストから、明確にメッセージを聴かねばならないということの理解を欠いているか、または、そこで説教者は自分の語りたいたことがすでにあって、テキストはただスタートラインか、跳躍台のごとくに使用されたということが考えられるでしょう。そして、あとは説教者自身の語りたいたことが語り続けられるということも起り得ます。それがたとえ、どんなに情熱をこめて語られようと、聴衆の興味をひくとしても、聴衆の内に、「このテキストは、そんなことを語ろうとはしていないのではないか」という疑念を抱かせることだって起ります。そのとき説教者のどんな迫力もその根柢を失ってしまいます。たしかに神の言葉の説教と言われながら、一方には、否定しがたく、なんとテキストが勝手、気ままに用いられて、情熱のおもむくままに語られるということが見られることでしょうか。

そうだからと言って、情熱こめて語るということが否定されたりするはずはありません。問題なのは、テキストに即してはダイナミックに語れないという理解とともに、テキストに即して語れば、それでよしとする考えであります。テキストに即するということが、そこからメッセージを明確に聴くということであるとするとするならば、聴いた者の心が燃やされずにおれるでしょうか。次のような言葉を私たちは謙虚に聞かねばならないでしょう。「われわれはイエス・キリストについて、その人格、そのみ業についての宣教が、人々の心を打ち開き、良心を自由にし、死の不安を克服するようになるように語り得ているであろうか。……なぜかと言えば、平均的に言えば、キリストの出来事の宣教が、いかに公式的で、生気を欠き、……」<sup>①</sup>と、M・ヨズツティスは、テキストに忠実であると言いなながらも生気を欠いていることもあり得ることを指摘しています。またR・ポレンは、次のように言います。「説教とは、喜びをめざす教えである。説教への手びきは、喜びへの手びきである。説教するということは、喜びへと至るべきなのである!」<sup>②</sup>。

テキストをとおして、神からのメッセージを聴いた者の驚きと喜びが基調にある説教は決して退屈なものではありません。得ないはずで、このような意味で、聖書に忠実な説教そのものに情熱も回復されるべきであって、テキストを離れたところでの、情熱にまかせた語り方に注意されなくてはなりません。このことを心がけないかぎり、テキストから聴いて、語るという説教の基本が確立される道はないからです。

このような説教を成り立たせることを妨げるもう一つの理由は、体験主義と言われるものの中にある要因と言えるでしょう。つまり説教というものが、テキストをとおして神からのメッセージを聴いて、伝えるということよりも、説教者が、あるいはキリスト者が、信仰に生きる体験が証しされることが、主要な内容と考えられるところでは、テキストはそれを支える副次的な役割しか果たさないとすることが起り得るのです。どれほど、その体験が真実に満ち、人の心を打つとしても、人をして、真の解放、自由を得さしめるのは、神から来る救いの御手なのですから、このこ

とは何ものによってもおぼろにされてはならないのです。救いは実に、神からだけ来るからです。神と、神のわざが明確にされなくてはなりません。体験主義と言われるものは、いつしかそれ自体に重点がおかれ、それを照らし、検討する光、規準を見失いがちであるという危険性を内包しているのです。それだからと言って、説教者や、キリスト者が、主にあって生かされる人生の現実、慰めと勝利を与えられる喜びを証しすることが禁じられるというわけではありません。それどころか、これがないならば、伝道も説教も成り立ちません。こういう体験主義への極端な反動が教条主義と言われるものであります。ここでは、真実に生き、検証し、告白を深めるという、キリスト教信仰に生きることの中にある、大切な点を欠いているため、本当の意味で、自らの信仰を確立することもできず、ましてや伝道もできるはずもありません。それでは体験主義ではない、正しく生きることによって認識、理解を深めて行く、生の営みをどのように規定し、位置づけたいのかという問題が浮び上って来ます。このことは、たとえそれほど自覚的でないとしても、今日まで真実なキリスト者の中では、明らかに見ることができるといえます。しかしながら、これらのことを生涯のテーマとして取り組み、思想することの中に、しっかりと位置づけられた者として、森有正を挙げる事ができるでしょう。彼はあえて、両者を区別するためにこれを、前者の「体験」に対して「経験」と呼んでいます<sup>⑨</sup>。

今論じている問題点との関係で言いますならば、説教者や、キリスト者たちの経験が語られるときも、御言葉の光に照らされ、検討され、御言葉が真実であることの告白を強め、より聴衆に具体的な語りかけをするために用いられるのであります。そこで語られる御言葉の真理への告白として、あるべき場を逸脱しないことが、その健全性を支えるのです。

聖書を神の言葉として信じているというだけでは、その告白が有効とは言えません。そう信じて、そのように扱われること、すなわち、畏れをもって聴かれ、語られ、とりわけ説教における、テキストの扱い方においてそれが具現されなくてはならないということです。また、聖書朗読や、聴く態度にも現わされなくてはならないことです。

日本の教会の成長の鍵の一つは、どこまで聖書の宗教に本質的なものである、理解すること、霊的であることとを調和的にとらえることができるかということであると言えるでしょう。正確にメッセージを聴くということになくてはならないものは、敬虔な態度とともに、聖書を理解するための学びでもあるからです。神が語られ、人が畏れをもって聴くところには、霊的な要素が確かにあります。また理解されることによって、いよいよ神への畏れと感謝が呼びさまされるのですから、理解することの大切さは強調されすぎることはありません。そういう意味で、説教には、会衆が理解すべきことがらについての教育的な要素も重要です。説教における預言的働きということが、ただ上から下への一方的な、対象への配慮を欠いた語り方と受けとられてはならないのです。特に日本のような、キリスト教の基本的なことについて、はなはだ理解を欠いている社会においては、どうしても「教える」という教育的な面が強調されなくてはなりません。この異教的勢力の強い社会で、信者たちが知らねばならないことがらについて、確かな理解、知識を与えられずにいることは、その日常的な戦いを、いや自己の信仰の確立をさえ困難にします。

会衆をして、生ける神の前に立たしめ、罪を自覚させ、その罪人に対する、神の取り扱い、救いの確かなことを知らしめ、主との関係を深めさせること、説教の任務は、究極的にはこのことにつきまします。まことに畏れ多い、重大な努めでありますが、このことなくしては結局のところ、日本伝道の前進もあり得ません。説教というものの占める位置の重さを改めて確認させられるのです。

## 対象理解の重要性

さてこれまでではおもに、テキストと説教の関係について考えて来たのですが、もう一つの面が大切な課題となりま  
す。それは、語る対象に関する問題であります。今まで考えて来ましたが、福音理解に関することと言える  
なら、これは対象理解であります。この二つがあいまって、説教は本来の使命と機能を発揮するのです。説教者が対  
象を理解することにおいて欠けているために、説教がその機能を果していないこと、したがって、このことが、伝道  
と教会形成の前進を妨げているという現実を軽視することはできないでしょう。反応としては、分かりにくい、理解  
できない、心に響かない、という声によって現われます。

対象理解と一口に言っても、この問題は、実に多様な面を含んでいます。人間一般としてとらえることにとどまら  
ず、その会衆を構成している人たちの生活と思想、感覚（フィーリング）という面からも考えられなくてはなりません。  
伝道の対象に関して言えば、諸宗教の問題があります。自覚するとしなやかにかかわらず、人はキリスト教に接  
する前に、何らかの宗教の影響を受けており、ある宗教観を持っているからです。これらの問題に関心と熱心をもっ  
て理解しつづけるということは、誠実さと、たゆまぬ努力が必要です。これらの中で、対象への理解のため  
の苦勞を回避しがちになるのです。そしてただ一方的に語る、ということが起りがちなのです。説教であれ、個人  
伝道であれ、おおよそ語る対象の関心や呻きからはずれたところで、ただ語りつづけられるということが、現実には、  
どれだけ大きくなつまずきともなり得ることでしょうか。

このような対象理解への熱心と態度を、例えばパウロの働きの全体から学ぶことができますが、それを集約的に示  
している箇所として、コリント人への第一の手紙九章一九節から二三節があげられます。「……のようになる」とい  
う、この姿勢と努力は宣教師になることによって非常にはっきりした形で、せまられたのでした。そして、私たちの  
本能はそれとは逆に、相手のようになるところか、「私のようになって、私の語ることを理解せよ」という態度をと  
りがちなのです。日本伝道の壁が容易に突破できないことの理由を、このこととの関係で、私たちが謙虚に反省しま  
すなら、聖書の宗教観、人生観とはこんなにも遠い日本人の思考や感覚に接近して行く努力を怠っているか、あるい  
は放棄していることにも見なければなりません。一人のキリスト者が育てられるために、いや私たち一人一人  
が、どんなに低いところから、迷いに満ちた状態から、一步一步、ひき上げられて行ったかを考えるなら、この曖昧  
で、しかも無知による頑固さの中にある同胞に対応して行く忍耐が求められるでしょう。

この問題を真剣に検討して行くところに、説教の問題の大切な部分を改革する、ひいては日本伝道の壁を打破する  
鍵があると言えるでしょう。対象に分らせることをぬきにしては何ごともしません。何ごとかが起るため  
には、何はともあれ、分らせなくてはなりません。対象の理解を得なくてはなりません。そのためにこそ、私たちは、  
対象への理解と洞察を必要としているのです。このための、たゆみない努力をぬきにしたところで、よく分る説教が  
成り立つことはあり得ないでしょう。もう少し一つの例で具体化しますならば、神の唯一性も、人格性も、絶対性も  
考えたこともなく生きている日本人に、聖書の神を語る時、このお方がどういってお方であるのかを説明するとき、  
彼らの迷いや、先入観や、不合理性に対して、考えられるあらゆる角度から語っていかなくてはならないというこ  
とです。神の唯一性や絶対性を、あたかもユダヤ的背景か、イスラム的背景の中に生きている者に語っているかのよう  
に、当然のごとくに語っていないかとの反省です。そんな明確な人格を持った、生きて働かれる神など考えたことも  
ない日本人に語るのならば、それなりの工夫と迫力が必要とされるはずで、そうでないとき、私たちの語るこ

は、対象の頭上をかすめて過ぎ去ることになるでしょう。

この問題はとても大きなものですから、ここで論じ尽くすことはできません。それは次のような言葉にも要約されると言えるでしょう。「ユダヤ人にはユダヤ人のようになり、ギリシヤ人にはギリシヤ人のようになるとは、単なる表現法の柔軟な変化以上のことを指している。それは、愛をもって他者の全思想と表象の世界へと自らを引き入れることである」<sup>⑤</sup>。

会衆に説教者を遠く感じさせるのは、まさにこのことが欠けている場合が多いでしょう。説教者は神の言葉を語るゆえに、その意味では、どうしても超越的な面を持っているのですが、ここで問題としていることを混同されてはならないのです。説教者が福音の出来事を証言し、神のなされたこと、教えられたことを宣言するとき、聴衆に聖なる距離を感じさせることは、あり得べきことです。しかし対象を理解する熱心や態度が欠けているための距離感、聴衆をして畏れの思いを起させるどころか、説教者を侮らせることにもつながります。

今日まで、日本人の精神史や諸宗教の研究などの重要性が言われながら、それらに十分取り組めなかった理由の一つは、日本の教会が対象理解、日本人理解に対する熱心において欠けていたことにあることは認めざるを得ないでしょう。このことは外国において、日本の宗教についての講義などを求められた場合に当惑してしまうということにも端的に現われています<sup>⑥</sup>。私もまたそのことを経験したのでした。

#### パブリック・スピーキングの問題

次に、有効に聴衆の心に届くために、説教において考えられなくてはならない技術的な面のいくつかを挙げて、共に修練することをめざしたいと思うのです。

まず、非常に基本的なことがらからふれていきますならば、人の前に立って話しをすることはどういうことなのか、それが効果的に成立するには何が必要であるかを検討することであります。日本語で適当な言葉が見当りませんので、「パブリック・スピーキング」という語を用いたのですが、いわゆる雄弁術とはちがった、もっと日本人にふさわしい健全な話し方、伝達の仕方を真剣に学び、修練することの必要性であります。それが何であれ、人の前で話しをするということは、それなりの原則、技術、広い意味の「アート (art)」というものを自覚しなければなりません。こんなことを改めて言わなくてはならないことに、実は日本社会の一つの特徴があると言えるようです。ことがらをはっきりさせるために、インドネシア社会とその教育と比較させて頂きましょう。こういう国と比べるならば、日本という国は、その大部分が単一民族、単一言語で成り立っている、驚くべき統一の基盤を持っているのです。言うならば、家庭内のような雰囲気を持った、家族共同体的な要素を十分に持っている面があります。このような社会を「甘え」という言葉でとらえた土居健郎の説などはあまりにも有名です。同族ゆえの甘えのゆるされる社会では、どうしても自分の意志、考えていることを伝達することに工夫したり、修練を積むということが怠られがちです。今日ではだいぶん崩れたとは言え、察し合い、補い合ってコミュニケーションを成り立たせている社会だからです。このような社会では、自分の伝えたいことは、容易に相手に伝わるという錯覚を起さしてしまう面があります。たとえこういう社会であっても、相手に効果的に伝達するためには、それなりの原則をしっかりと踏まえなくてはならないのに、そのことへの注意が欠けるのです。

生々とした話し言葉を用い、音声を聴衆によって測定するというような最も基本的なことすら無視される場合だつてあるのです。人間というものがどれくらい集中力が持続できるのかを考えて、話しの運び方、問のとり方などを

身につけることは、一つの技術であるとともに、相手へのいたわりという愛の配慮でもあります。さきにふれましたように、日本という社会がこの面での修練を要求することが少ないために、説教者たちが、それまで受けた教育の場において、何ら訓練されることがなかったということがあり得るのです。ですから何十年も人の前で話しをしながら、パブリック・スピーキングにおいて、何ら自覚的努力をしないですますということがあり得るのです。

このことは多民族、多言語で成り立っていて、自分の考えていることが相手に伝達されるためには、それなりの工夫と努力がいることを考えないでは日常生活さえも困難である国々の事情と比較してみれば明らかになります。このような国の人間が、はるかにこの面で優れているのは以上のような理由によるのでしよう。

日本人は内容とともに、それを入れる器や盛りつけにも細心の注意を払う美意識に富んだ国民でありますから、自覚さえあるならばこの点でも明るい可能性があるのです。

さらにはこの問題は、日本語をどれだけ自覚的に愛して、身につけるかにかかっています。その言語の持っている性質や構造を理解する言語感覚、レトリックのためのレトリックではなく、効果的に伝達し、説得するためのレトリック感覚の重要性などが強調されなくてはなりません。これらのことのために第一に必要なことは、自覚的に人の話しを聴き、また読む、さらには書くということが挙げられます。自覚的な語り手は、自覚的な聴き手でもあるからです。また自覚的な聴き手であってこそ、語り手でもあり得ると言いかえることができるでしょう。

### 聖霊の助けを求める祈り

最後に考えられますことは、非常に大切なことですが、いわば説教に関する総まとめとして述べたいと思います。それは祈りであります。このことは、説教に関するすべての営みの最後に祈りがあるということではなく、初めも、その準備のプロセスも祈りによって進められなくてはならないのですが、とりわけ講壇に立つ前に、真剣な祈りが捧げられるべきです。聖霊のお働きを求め、語られるメッセージが聴く者の心に届き、理解されるように助けを祈り求めるべきであります。

メッセージは聖霊が働かれることによって聴衆に理解されるというとき、極端な結論を引き出すことのないように注意しなくてはなりません。それは語る説教者の知性や準備というようなものと全く無関係に、聴衆に理解がもたらされると考えることです。確かに聖霊は、主権的に、自由に働かれますが、説教者の知性、霊性を啓発し、勤勉をよびさまし、さらに対象理解を深めさせ、反応をキャッチする敏感な、正確な判断力や感受性をも導いてくださるということです。これは神の主権と人間の責任の問題にも通ずる、まことに全能の神のみがなされる、驚くべき調和と語るでしょう。神のわざを強調しても、人間の責任を欠落させる考え方も、人間の責任を強調して、神の主権的働きを一貫して認めることに欠けを生じるのも、何れも聖書の真理に反します。あなたも相対者と相対者の関係の如くに神を考えてしまふ恐るべき誤りであります。人間の自然的理性では解し得ない深さと神秘さをもった神のお働きの現実と言えます。神の力強いお働きの支えの中でこそ、私たちの誠実な責任を果し得るとも言えるのです。

インドネシアの教会では、礼拝前と礼拝後に説教者と教会役員が祈りを共にすることが制度として定着しているのですが、日本の教会の場合は、行われている場合もあれば、そうでないこともあります。教会役員が会衆を代表して、説教者のために祈らないで礼拝が始められるということは、考えてみれば大変な欠けめであると言えます。ぜひこのことを制度としても、内実としても確立したいものであります。



結論として言えますことは、聖書を神の言葉として信ずる者たちが、その告白を現実のものとして行くために、なんとと言っても説教をするということの中で具体化されていかななくてはならないということです。そうでなくてはこの異教的、無神論的背景の國、日本に、強力な福音伝道も教会形成も達成されないからです。私たちが説教の問題に、思い新たに取り組むことによって、日本伝道の困難な壁の一角を突破していけることは確かでありましょう。

各教派にそれぞれの強調点があるように、それはまた説教の理解、タイプにも現われております。この大きな、困難な問題のすべてを解決していると言える者は一人もいないはずですから、私たちに必要なことは、自己の教派や説教理解を絶対化することから自由にされて、互いに学び合う謙遜を身につけることであります。そうでなければ、伝統や立場を異にするところがありながら、なお協力して、日本伝道という大きな課題の達成のために励まんとする福音主義神学会の意義は実現されません。お互いに欠けたるもの、弱さが補われ、強化されて行くならば、ここから新しい希望が開けてくるのです。福音主義神学会のような交わりと学びの場が、このことを可能にするものとなるように、自覚的に参加するとき、主の祝福を期待することができますのであります。

## 注

これは昨年秋（一九八五年十一月）福音主義神学会、第三回神学研究会議でなした講演に幾分か加筆したものである。

- ① マンフレッド・ヨズツティス著 加藤常昭訳「現代説教批判―その律法主義を衝く」日本基督教団出版局、一九七一年、一〇四頁。

- ② R・ボーレン著 加藤常昭訳「説教学Ⅰ」日本基督教団出版局、一九七九年、一八頁。

- ③ 森有正「木々は光を浴びて」筑摩書房、一九七三年、四六頁。

森有正の著作の大部分は、一貫してこの経験の問題に集中しているとも言えるが彼がこの問題にたどりつく背景がよく現わされている箇所として、ここを選んだ。

- ④ H・J・クラウス説教論 佐々木勝彦訳「力ある説教とは何か」日本基督教団出版局、一九八二年、九七頁。

- ⑤ 古屋安雄「宗教の神学―その形成と課題」ヨルダン社、一九八五年、一〇六頁を参照されたい。

(神戸改革派神学校学監)